つぶやき

博多とアジアの映画 142

松浦　仁

１９７４(昭和49)年、東和は香港のゴールデン・ハーベストが製作した２本のブルース・リー主演のカンフー映画「ドラゴン危機一発」(１９７１)と「ドラゴン怒りの鉄拳」(１９７２)を日本に輸入・配給した。翌年にはブルース・リーの出世作と言われているアメリカのテレビ番組「グリーン・ホーネット」をブルース・リーの登場シーンを中心に再編集して１９７４(昭和49)年にアメリカで劇場公開した「ブルース・リーのグリーン・ホーネット」(１９７３)を輸入・配給した。

ブルース・リー主演映画の配給に力を注ぐ東和は、ブルース・リーが初めて監督・脚本・武術指導・主演の四役を務め、香港映画初のローマ・ロケを敢行した「猛龍過江」(１９７２)の配給契約を配給元のゴールデン・ハーベストと交わし(実際は、書面ではなく東和の社長、川喜多長政とゴールデン・ハーベストの社長、レイモンド・チョウが交わした口頭契約だったらしい)、「ドラゴン電光石火」という邦題で雑誌広告など全国公開するための販促活動をすすめていた。ところが、東和はゴールデン・ハーベストから４作品、「片腕ドラゴン」「ドラゴン危機一発」「アンジェラ・マオの女活殺拳」「ドラゴン怒りの鉄拳」を輸入した実績があったものの、ゴールデン・ハーベストは「猛龍過江」を日本大手の映画会社である東映(東映洋画)に輸出することにした。東映は１９７５(昭和50)年１月に「猛龍過江」を「ドラゴンへの道」という邦題で全国公開した。東和にとっては青天の霹靂であり、怒り心頭に達したことだろう。

川喜多長政はこの一件もあって、さらにフランス映画「ル・ジタン」(１９７５)も東映に買い付けで負け、個人経営の東和だけではヨーロッパやアジアの映画にも手をのばしだした競合する大手の映画会社に太刀打ちできないと痛感した。そして、東映、松竹とともに最大手の映画会社である東宝に東和の株を半分売却して１９７５(昭和50)年４月に社名を東宝東和(東宝東和株式会社)に変更した。東映が「ドラゴンへの道」を全国公開してからわずか３ヵ月後のことだった。

１９７５(昭和50)年１月、東和は前年に輸入した香港のカンフー映画「ドラゴン武芸帖」(１９７３)を配給した。「ドラゴン武芸帖」は、カンフー映画の名匠ジミー・ウォンが主演し、脚本・監督も務めた、中国・九華山の奥地に要塞を構える盗賊団と青年武芸者の戦いを描いた武侠アクション映画だった。「ドラゴン武芸帖」は、東和という社名で輸入・配給した最後のアジア映画だった。

そして、東和を引き継ぎ新しい社名になった東宝東和は、川喜多長政を社長とし東和時代と同じく外国映画の輸入・配給を１９７５(昭和50)年７月からおこなった。東宝東和が配給した１９７７(昭和52)年までの作品は以下の10本だった。

○１９７５(昭和50)年　１本
「アラン・ドロンのゾロ」(１９７５、イタリア・フランス)

○１９７６(昭和51)年　３本
「Ｏ嬢の物語」(１９７６、フランス)「愛のコリーダ」(１９７６、日本・フランス)
「キングコング」(１９７６、アメリカ)

○１９７７(昭和52)年　６本
「スクワーム」(１９７６、アメリカ)「アドベンチャー・ファミリー」(１９７５、アメリカ)「サスペリア」(１９７７、イタリア)「カプリコン・１」(１９７７、アメリカ・イタリア)「極底探険船ポーラーボーラ」(１９７７、日本・アメリカ)「オルカ」(１９７７、アメリカ・イタリア)

東宝東和は１９７５(昭和50)年の社名変更から１９７７(昭和52)年までの３年間、香港映画を１本も輸入・配給していない。この間に日本で公開された香港を含むアジア映画は以下のとおりだった。

○１９７５(昭和50)年　０本
○１９７６(昭和51)年　２本
「実録ブルース・リーの死」(１９７５、香港、配給　松竹(富士映画))「片腕カンフー対空飛ぶギロチン」(１９７５、z香港、配給　松竹(富士映画))

○１９７７(昭和52)年　３本
「激殺！邪道拳」(１９７７、日本・香港・タイ、配給　東映)「空飛ぶ十字剣」(１９７７、台湾、配給　東映)「ゴルゴ13九竜の首」(１９７７、日本・香港、配給　東映)

１９７３(昭和48)年、「燃えよドラゴン」が７月に香港で、８月にアメリカで公開され大ヒットした。そして、日本の映画関係者はおそらく12月から公開される「燃えよドラゴン」が翌年の正月映画の目玉となり、日本では無名だった主演のブルース・リーがブレークし、日本では馴染みのなかった香港の空手映画がカンフー映画として、話題をさらうだろうと予想していた。日本の映画配給各社は、すでに製作されていたカンフー映画の輸入・配給に着手した。そして、各社の争奪戦が繰り広げられ27本



ものカンフー映画がこの年一挙に公開された。

１９７５(昭和50)年、前年にカンフー映画27本を輸入・配給した反動から公開できる既存のカンフー映画は皆無だったのだろう。それでも「燃えよドラゴン」は日本全国の映画館で再映、再々映され、ブルース・リーの人気は10代、20代の若者を中心にヒート・アップし、日本の映画ファンは香港のカンフー映画に熱狂した。

そして、翌年の１９７６(昭和51)年は２本のアジア映画が公開された。１本は若くして急逝したブルース・リーと愛人ティン・ペイとの関係を実録風に描いた「実録ブルース・リーの死」(１９７５、香港)だった。

『ブルース・リーは、「ドラゴン危機一発」の撮影のため香港に帰った時、女優を目指していたベティ・ティン・ペイと出会い、次第に親密な仲となる。リーは新作映画のヒロイン役にベティを抜擢することを決めるが、原因不明の頭痛で倒れた。やがて、リーはアクション・スターとしての地位を築きあげ、ティン・ペイとの関係も幸福の絶頂にあったが、１９７３年７月20日、リーはベティ・ティン・ペイの部屋で急逝する。』

主役はブルース・リーに容貌が似たシュー・シェンが抜擢され、ベティ・ティン・ペイが実名で登場している。配給は松竹(富士映画)で、博多では10月９日からピカデリー２で公開された。

そして、もう１本は香港のカンフー映画「片腕カンフー対空飛ぶギロチン」(１９７５)。ジミー・ウォンが主演・脚本・監督、ゴールデン・ハーベストが製作した「片腕ドラゴン」(１９７２)の続編で、同じくジミー・ウォンの主演・脚本・監督だが、製作は第一影業だった。『18世紀清朝、中国各地の武術家たちが武術大会に集まった。その中にかつて右腕を切り落とされ、残る腕を鉄の左腕とした無双の武術家、片腕ドラゴンの姿があった。そこへ現れた盲目の老暗殺者、フンシェンは、片腕ドラゴンに倒された弟子の仇を取るため、必殺の空とぶギロチンを武器に片腕ドラゴンの命を狙う。』実録ブルース・リーの死」と同じ、香港のカンフー映画人気に当て込んだ松竹が配給して、１９７６(昭和51)年11月27日から東京で封切られ、博多では3日遅れて11月29日から福岡松竹で公開された。松竹が製作した日本のカンフー映画「少林寺拳法　ムサシ香港に現わる」との2本立てだった。

次号に続く

＝図版は、「アンジェラ・マオの女活殺拳」＝